

卷頭言

時間生物学と情報発信

明石 真[✉]

山口大学 時間学研究所

この数年で時間生物学会が少しづつ変わってきたように感じる。以前は概日時計の分子メカニズムに関する研究報告が主流であったように思うが、最近では医学領域の発表演題が増えてきており、また多様な生物を対象とした概日時計以外の研究発表も注目されるようになってきた。今年度は福岡で開催される予定であるが、引き続き特色ある大会になりそうでとても楽しみである。

ところで、最近では、大きな研究費が採択されると、成果の情報発信が実績の一部として求められるようである。新聞や雑誌の紙面だけでなくテレビやラジオに至るまで、発信媒体の形態を問わず、研究成果を積極的に国民に公開することが半ば義務のようになってきている。また、地方大学や私立大学においては、経営上の理由もあり、教員のメディアへの露出に前向きであるように思う。そして、そもそも時間生物学の研究成果は、現代人の心身パフォーマンスや疾患予防の観点から、情報発信が社会にもたらす貢献は小さくないはずである。さらに、情報発信によって時間生物学に対する社会的理解が進めば、研究領域の発展にも大いに貢献するのではないだろうか。

しかし、情報発信には、研究者にとって悩ましい部分が少なからずある。例えば、科学的な成果をお茶の間に伝えるためには、表現上の工夫が相當に必要になる。専門家ではない記者に対して、誤解のないように繰り返し説明をする作業は忍耐を要する。実際に発信された情報が研究者側の意図しない内容である場合も少なくない。もちろん、情報発信は大学や研究室のホームページから研究者自身によって実施可能であるが、学外への発信力は残念ながら極めて低い。したがって、テレビや新聞などの強力な情報拡散力に頼ることになるのだが、一部を除いて、それらは企業利益の上に成り立っているという現実がある。たとえ大手の新聞であっても、小難しい専門的な記事では読者の購買意欲にはつながらない。話題の中心が記者の好み（あるいはデスクの好み）に記事が変更され、本来の成果からニュアンスが変わることは決して珍しいことではない。研究者は専門的な意義を強調したいのに対して、媒体企業は読者の興味をひくことがとても大切なのである。

私たち研究者は、実験データに基づいて、できるだけ客観的にかつ慎重に解釈しながら論文を書くのが仕事である。したがって、情報発信された記事の飛躍のある主張に対して強い違和感を覚えてしまう。実験データをこつこつと積み上げてようやく発表に至った研究成果であるのに、本来の主張から視点がずれて報道されることに抵抗を感じるのである。そしてこれは情報の発信者だけの問題にとどまらない。商業誌によって風呂敷が広げられた記事を見ることで、情報発信をした研究者に対して周囲の研究者が嫌悪感を覚えるケースもある。このような事態をおそれて、取材を拒否する研究者もいるだろう。私の経験からすると、情報発信することで、基礎の研究者がなんらかのメリットを得ることはほとんど無い。例えば、競争的資金の獲得において、情報発信の実績が役に立ったことはこれまでのところ一度も無い。メリットがあるとすれば、家族や親戚が褒めてくれるのが嬉しいことくらいである。メリットどころか、時間がとられるにもかかわらず、記事の内容によっては思わぬ方向に目立ってしまい、むしろ立場が悪くなることさえある。まさにハイリスクローリターンである。このような背景においては、情報発信を進んで行う研究者は限られてくるのが道理である。しかし、それで良いのだろうか。

最近の研究成果によって、概日時計と多岐にわたる現代疾患との関係が次々と明らかになってきており、現代社会においては概日時計を考慮して生活環境や生活習慣を改善することが急務であろう。概日時計に関する情報は、老若男女を問わず健康のために大いに役立つはずである。また、時間医療のような新規概念が医療現場で広く実用化されるには、社会の幅広い理解が必要である。さらに、社会が時間生物学の重要性を認識すれ

[✉]akashima@yamaguchi-u.ac.jp

ば、研究領域に対する支援が期待できる。したがって、情報発信が果たす意義は大きいのではないだろうか。医療の最前線にいる臨床医にさえも、未だ概日時計の重要性は意外なほど浸透していないように、現状においては十分な情報発信が行われているとはとても言えないのではないか。しかしながら、情報発信を活発化するためには、研究者コミュニティにおいて、上記のような背景に対する寛容な理解と相互のサポートが必要なのかもしれない。